

愛するということ

～私の生きがい～

岡山の小島にある私の大好きなハンセン病療養所、長島愛生園。私は、社会から断絶された入所者から、どうすれば「共に生きる社会」を創れるかという問いを投げかけられている。

ハンセン病はかつて「らい」と蔑まれ、国の終生絶対隔離政策に基づき、家族や古里から切り離され、名前も、健康も、時には命も奪われた。私は交流を続けながら、差別を生き抜いた入所者の「生の声」を後世に残そうと記録し続けている。

教員である父の影響もあって、私は母のお腹にいる時から長島愛生園に通っている。私の名前の「泰」の字は、入所者の金泰九さんから父がもらって私に付けた。子孫を残すことを禁じられた入所者たちはみな、子どもの私を抱いて愛してくださった。

コロナ禍で入所者との交流ができない時、私は愛生園に佇む「神谷書庫」で読書に耽った。書庫は、かつて愛生園で精神科医として勤務した神谷美恵子先生を顕彰するものだ。先生直筆のメモが残された本もあり、先生の息づかいも感じられる。私はそこで、先生の名著『生きがいについて』と、フロムの『愛するということ』の2冊に出合った。

『生きがいについて』の洞察の主軸ともいえる人物は近藤宏一さん。幼い私を抱いて愛してくださった一人である。彼は、同じ盲目の入所者仲間とハーモニカ楽団「青い鳥」を創設し、絶対隔離政策の時代にあって、ついには有楽町で演奏会を開くほど、その音楽の評価は高かった。

病気の後遺症で指が欠損し、感覚もない入所者たちは点字楽譜が読めなかった。近藤さんは、自ら楽譜を舌読し、口に血をためながら楽団員にドレミを授けた。

「（「青い鳥」の）よろこびが、真の生の充実感から湧きあがっているものであることは、この楽団の練習をこっそりとのぞいてみればわかる。指揮者（近藤さん一筆者）の……烈しく、きびしい指揮のもとに全員が力をふりしぼって創り出す協和音。これほどすばらしい生命の燃焼の光景を私はあまりみたことがない」と神谷先生は、『生きがい』に記している。

近藤さんは言う。「……萎えた手に握りしめる一個の小さなハーモニカを手にして私はいつも慰められている。皆でうみだした喜びと希望が細く優しい音色とともに夕べの窓辺でいつまでも私の心を揺り動かしているのだった」と。

『愛するということ』にこうある。「人を愛するということは、なんの保証もないのに行動を起こすことであり、こちらが愛せばきっと相手の心にも愛が生まれるだろうという希望に全身を委ねることである」と。「青い鳥」はフロムの言葉どおりに、音楽を通して人を愛し、行動を起こして希望に全身を委ねた。神谷先生はそこに、人間の真の「生きがい」を見たのだ。

コロナ禍で、人と人との断絶され、偏見や差別が広がり、傷つく人がいる。だからこそ、「共に生きる社会」の構築がますます重要となっている。神谷先生が入所者から学び、愛したように、近藤さんら入所者から愛され、学び続ける私は、「共に生きる社会」を創る一人として、どんな人も自分から愛する人でありたい。いま、それが私の「生きがい」となった。